

後期エマソンに対するシェリングの影響

高梨 良夫

従来の R. W. Emerson (1803–82) の思想の変化についての解釈は、ウィッチャーの『自由と運命』に代表されるように、中期から後期にかけては、青年期の個人の魂の無限性を主張した「自己」中心的な Transcendentalism の限界を意識し、現実世界との対決を避けられず、次第に経験主義的で、運命に黙従的な面を示すようになっていったとするのが主流であった。しかし特に最近のアメリカではむしろ哲学者、政治・社会倫理思想家としての側面が注目され、ニーチェやハイデガーなどの思想との関連性、さらに実存主義、現象学、プラグマティズムの先駆者として位置付けようとする研究などに代表されるように、思想の現代的先駆性が注目されるようになってきている。本発表においては、ドイツ超越論哲学者 F. W. J. Schelling (1775–1854) の 1809 年の著作『人間的自由の本質』（『自由論』と略記）の影響に焦点を当て、エマソンの思想の変化を、前期の超越主義の挫折よりもむしろ克服であり、積極的な発展ととらえ、思想の展開・変容の帰結である中期・後期にこそ現代的意義を見出し得るのでないかという視点で考察してみる。

エマソンの思想は特に 1842 年 1 月の長男ウォルドーの死を契機に変化を示し始め、それは『エッセイ・第二集』（1844 年）に収められた「経験」に顕著に示されているとされている。ロビンソンは「経験」について、「エマソンの思想の転換点になるものとして広く認識されており、エマソンの思想展開の次の意義深い段階を指し示している」（Robinson, 391）と述べている。講演「自然の方法」（1841 年）では、「神の秩序のなかでは、理知が第一で、自然は二次です。自然は心の記憶です。理知のなかにかつては純粋な法則として存在していたものが、いまでは自然として具体的な形をとっています」（EL 1:123）と述べ、自然は「魂」が具体的な形態をとって顕れ出たもので、人間精神は自然に優越する特別な存在で、自然を創造するものとさえみなす超越主義的な自然観を表明していたエマソンは、「魂」はむしろ自然に内在し、人間は自然の一部としてより大きな宇宙的魂に関与していると考え、生命の不断の流れと永遠に尽きることの無い活力を、人間の魂よりもむしろ自然の内奥部に求めるようになってゆくのである。

人間個人の内面の成長を重要視する「自己信頼」（Self-reliance）と精神と自然の間の「照応」（Correspondence）を中核とする超越主義思想が再構築を迫られていた移行期に、エマソンがベルリン大学でシェリングの講義を聴講した J. E. キャボットが英訳した『自由論』の手書きの原稿〔現在 Schlesinger Library, Radcliffe Institute に所蔵〕を 1845 年に読んだことを契機に、シェリングの思想に直接的に接した事実は注目すべきである。シェリングは J. G. フィヒテの「自我哲学」の影響を受けながら「自然哲学」を構想し、さらに「超越論哲学」、「芸術哲学」、主観と客観、精神と自然の同一性を探求する「同一哲学」を展開したが、その限界を自覚するに至り、ドイツのキリスト教神秘主義の思想家ヤコブ・ベーメの影響を受けながら、『自由論』によって非理性的・宗教的傾向を強めた後期に移行していった。シェリングの同一哲学期から「積極哲学」を展開した後期思想への移行を最も象徴的に示す『自由論』との出会いは、同じく思想の移行期に直面していたエマソンの知的関心を強く刺激した。また多くの学者が S. T. コウルリッジがエマソンの超越主義思想の形成に直接的影響を与えたと指摘している。コウルリッジは『文学的自叙伝』の第 9 章において、シェリングの著作からの剽窃との批判に対して弁明をしながらも、シェリング思想との一致を認めている。エマソンがコウルリッジから影響を受けたのは、シェリングの「自然哲学」から「同一哲学」に呼応する精神と自然の同一性、理性と悟性、極性、想像力と空想などの教義であり、エマソンは既に青年期からシェリングの「同一哲学」に間接的にせよ接近していた。

シェリングは万物を「現存する限りのもの」と「現存の根底である限りのもの」に区別し、自然における光と重力（闇）の二つの原理の関係を、重力は光の存在の根底である限りの存在と説明する。そして自然と精神という二元的に相対し合う存在の根底に内在する唯一の原理を「無底」（Ungrund）とし、「同一」ではなく「無差別」の原初的原理と説明している（Schelling 128）。自然万物の探究は神に対しても向けられ、「現存する限りの神」と区別されるものとして「神の現存の根底」、すなわち「神のうちの自然」（Natur in Gott）が提示される（70）。シェリングは「無底」を始原とする神を、自らを生み出そうと「憧憬」し、悟性を「欲動」し、「意志」する動きととらえている。すなわち無規則な暗闇が根底にあり、憧憬が悟性によって刺激を受け、諸力の分開がもたらされ、個々の事物が意志の力によって秩序・規則・形式の次元、さらに言葉へと変容してゆくという、生命発動のプロセス、エネルギーの流れ、生命が形象化・身体化してゆく「神の自己顕現」ととらえる思想を展開している（71–75）。

エマソンは日記に「奈落の底」（Abgrund）、「混沌」（Chaos）、「根底」（Ground）、「深淵」（Abyss）などのシェリングの Ungrund を想起させる語を記している（JMN 222–23）。講演「思想家の傾向と義務」（1848 年）では、本能を混沌、すなわち受動・無意識・無言語、靈感を能動・意識・言語の状態とし、靈感の根源を本能の本源的活力に求めている（LL 1:177）。また講演「精神哲学の自然的方法」（1858 年）では、シェリングの Shewere（重力）、Zentrum（中心性）、Scheidung（分解性）、Dualität（二元性）と同義の Gravity、Centrality、Polarity などの語を使用している（LL, 2:97–98）。

シェリングは悪を欠乏、不完全性、不調和とする受動的な考え方を否認し、悪の本質は神のうちにではなく、根底

の意志のなかにあり、常に善と戦い、不調和を調和に逆転させようとする積極的な力と考えた。そして「自己性」を有していることが人間の特性で、自己性が根源意志、光の原理から離れ、根底の外に、被造物のままに留まろうとすることに悪の発現の可能性があるとし、光の原理と闇の原理の両方が働き、人格的統一と結合することで精神にまで高めることが出来、意志の自由を賦与されている人間のみが善と悪の所行をなし得ると主張している (Shelling 89)。

エマソンは「神学部講演」(1837年)で、「悪は欠落に過ぎず、絶対的なものではありません。悪はすべて、どれもこれも死あるいは非実在です」(CW 1:78)と述べたが、『処世論』(1860年)に掲載された「運命」には、悪を善の欠落態とする青年期の善悪観を転換し、「悪とは形をなそうとしている善である」(6:19)と記している。エマソンにとっては、いのちが「自然力」、「原始的な根源」と直接的に結びついていることが最も重要で、善とは「積極的なものすべて」であり、シェリングと同様に、善と対立しつつ善を実現するという悪の積極的な役割を認めるに至っている。

エマソンの「自己」中心的な超越主義を克服しようとした中期から後期への思想の変化は、運命に対する考えにも同様に認められる。『エッセイ集・第一集』(1841年)に掲載された「自己信頼」において、「人はすべての状況をどうでもよいものにしてしまわずにはおかない程の存在に違いない」(2:35)と記したエマソンは、エッセイ「運命」では、「かつては積極的な力こそすべてだと思い込んでいた。今では消極的な力、つまり状況が残りの半分をなしていることを知った」(6:8)と記している。また人間を自然の一部ととらえ、「自然の書物は運命の書物」、すなわち自然と運命を同一のものとしながらも、「なぜなら、運命がいたるところに勢力を広げているとしても、人間もまた運命の一部であり、運命には運命をもって立ち向かってゆくことが出来る」(13)として、運命や自然の途方もない巨大さ、恐ろしさを認めながらも、人間を自然の秩序に属さない「対抗存在」と規定する。そして「人間は考える限り自由なのだ」として、自然から生来賦与されているもう一つの運命、すなわち自らの自由な意志、思考する能力を行使することによって、運命の制約を受けながらも、自らの運命と対峙し、超克してゆくことが出来る存在として、「美しい必然のために祭壇を築こうではないか」(26)と呼びかけている。また「どんな人間のなかにも、自分が永遠の昔からずっと今の通りの存在であって、決して時間の経過のなかで現在の自分になったのではないという意識が備わっている」(7)は、人間の行為は永遠の昔から限定されているとみなさず、人間の本質を意志の自由と行為に求めるシェリングの『自由論』の一節に対応している。さらにエマソンの“beautiful Necessity”はシェリングの“heiligen Notwendigkeit”と同義である。

エマソンは、「善はすべての悪をもとにして生ずることがあるかもしれない」(JMN 2:420)、また「全ての不幸は幸福に通じているのだ」(3:29)として、善悪、自らの運命に関する「償い」(Compensation)の思想を、既に眼病に苦しんでいた牧師職就任以前の若年の頃に日記に記しているように、思想の変容は、自身の人生経験と内面における思想展開の必然的な帰結であり、シェリングの『自由論』の受容・影響のみを強調することは必ずしも妥当でないとはいえ、両思想家の思想の遍歴の間には顕著な親和性を認めることが出来る。エマソンは「奈落の底」、またエッセイ「償い」においては「真の〈存在〉の原初の深淵」(aboriginal abyss of real Being)(CW 2:71)という「無底」に極めて近い語句を使用し、さらに「大霊」(Over-soul)を超えた「神性」(Godhead)(3:44)という非人格的な神概念をも見出していることから、『自由論』で展開された「無底」、「神のうちの自然」を「神の顕現」の始原とする、「同一哲学」を克服したシェリングの思想を主体的に受容することによって、精神と自然、主観と客観の根底に「同一性」を設定する「大霊」に代表される汎神論的な傾向を持つ超越主義思想を、一定程度は克服してゆくことが出来たのではないか。

引用文献

- Emerson, Ralph Waldo. *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, 10 vols. Edited by Ferguson, Alfred R., Slater, Joseph, Wilson, Douglas E. et al. Harvard UP, 1971–2013. CW と略記。
- _____. *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, 3 vols. Edited by Spiller, Robert E., Whicher, Stephen E. and William, Wallace E. Cambridge; Harvard UP, 1959–72. EL と略記。
- _____. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, 16 vols. Edited by Gilman, William H. et al. Harvard UP, 1960–82. JMN と略記。
- _____. *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson, 1843–71*, 2 vols. Edited by Bosco, Ronald A. and Myerson, Joel. U of Georgia P, 2001. LL と略記。
- Robinson, David M. “Experience, Instinct, and Emerson’s Philosophical Reorientation.” *Emerson: Bicentennial Essays*. Edited by Bosco, Ronald A. and Myerson, Joel. Massachusetts Historical Society, 2006, 391–404.
- Schelling, F. W. J. *Über das Wesen der Menschlichen Freiheit*, Einleitung und Anmerkungen von Forst Fuhrmans. Philipp Reclam, 1964.
- Whicher, Stephen E. *Freedom and Fate: An Inner Life of Ralph Waldo Emerson*. U. of Pennsylvania P, 1953.
- シェリング著・藤田正勝訳「人間的自由の本質とそれに関連する諸対象についての哲学的探究」、藤田正勝編『シェリング著作集 4a 一自由の哲学一』、文屋秋栄、2018年。